大正・昭和初期新教育運動の研究(7)

——山口県阿武郡更新会を中心として——

志　村　廣　明

A Study of the "New Education Movement" in the *Taisho* and Early *Showa* Era (7)

——Educational Activities of the *Koshin Kai*, the voluntary group of teachers, in Yamaguchi Prefecture——

Hiroaki Shimura

Summary

The main purpose of this article is to study the historical meanings of the *Koshin Kai*, the voluntary group of teachers, in Yamaguchi Prefecture. The group was organized in 1920 in order to help its members to promote their self-education, whose chief aim was to encourage self-cultivation of the teachers rather than the improvement of their teaching methods and techniques. Its main activities included a lecture meeting, seminars for reading various books for their self-cultivation, and the publication of their journals.

Soon, the group had suffered from its own financial difficulties and in 1924 the county education authority wanted to restrict freedom of forming voluntary study groups of teachers held outside their workplace. The county education authority practically planned to make it impossible for the group to have its meetings by means of the teacher placement policy which would aim at scattering of group members to the schools in remote areas. Though this policy was not actualized, the group members gave up their activities.

In spite of its short period of their activities, the *Koshin Kai* played an important role on the local education movement of Yamaguchi Prefecture during the 1920's. The historical significance of the *Koshin Kai* lies in the fact that it encouraged the emergence of other voluntary teachers' groups which promoted their members' self-cultivation.

Received 22 Dec. 1987

Key words : *Taisho* New Education Movement, *Koshin Kai*, Self-Cultivation of Teachers

はじめに

筆者は，10年程前から，いわゆる大正新教育運動を課題に取り上げ，研究を進めている。本論文は，この研究の一環として，大正期に高揚した教師のサークルの一つである山口県阿武郡更新会を取り上げ，その活動の実態を考察することをおもな目的とするものである。

大正期には，民主主義的な風潮を基盤として，更新会のほかにも，闡明会（高知県），黎明会（茨城県），無名会（新潟市），青年教育者同志会（秋田市），高崎教育研究会（高崎市）をはじめ，全国各地にサークルが生まれた。しかし，デモクラシーが衰えはじめる頃，それらのサークルは，行政権力から抑圧され，短期間で衰退していった。

本論文で考察する更新会に関する先行研究はほとんどみられず，更新会の中心メンバーの一人である桑原茂政による「更新会盛衰記」（小原國芳編『日本新教育百年史』7（中国四国）所収　玉川大学出版部　昭和45年8月28日）および1977（昭和52）年8月12日から27回にわたって西日本新聞に連載された「教育の原像をさぐる」等があるのみである。これらの記事は，おもに当時の回想にもとづいてなされた点に限界がある。

筆者は，資料収集活動（聴き取り調査を含む）[1]を行うなかで，更新会のリーダーの一人，三戸雅乙の4男三戸規生氏のもとに保管されていた雑誌『更新』（創刊号から第25号）を発見することができた。

本論文では，雑誌『更新』を中心とした資料により考察を進め，更新会の実態を一層明確にしようとする。

Ⅰ．更新会の結成

1920（大正9）年，山口県阿武郡の東部地方を中心として，更新会が結成された。その中心メンバーは，三戸雅乙（徳佐尋常高等小学校訓導），山縣良正（篠生尋常高等小学校長），山内貞助（亀山尋常小学校長），吉岡恒郷（福田尋常高等小学校長），森吉祐（吉部尋常高等小学校長），山本悟（徳佐尋常高等小学校訓導），桑原茂政（大井尋常高等小学校訓導），および鹽見與平登（蔵目喜尋常小学校訓導）等の同郡内の教師であった[2]。

このメンバーの一人の桑原茂政は，のちに「更新会盛衰記」（小原國芳編『日本新教育百年史』7（中国四国）所収　玉川大学出版部，昭和45年8月28日）のなかで，更新会の運動が展開された舞台である阿武郡の当時の状況について，次のように述べている。

> 当時，阿武郡といえば，中国山地の北側に沿うた山間の盆地で，地理的には山陽道となっていても，風土的には全く山陰といってよく，文化にもめぐまれぬ，むしろ立ち遅れの地域とされていた。……一般的には県の教員配置でもあまり重要視されず，優秀な教師はこの地方には配置されないものと考えられ，したがって教育研究も低調であるとさえ思われていた。（前掲書　P．315）

同年夏，三戸雅乙，山縣良正，桑原茂政，鹽見與平登の4名が地福村の三戸宅へ集まり，徹宵協議

して，8月31日付で5つの綱領からなる「更新会宣言書」をつくりあげた。『更新』の創刊号によれば，その綱領は次のとおりである[3]。

一，吾人は世界の大勢並びに我が国現下の情勢に鑑みて将に覚醒奮起すべし。

這回の世界大戦は人類生活史上に一大変動を来し各種の思想，運動は澎湃として起り其の帰する所を知らず各国とも其の国家組織社会制度に対して不安動揺の兆あり，一面巴里会議は平和保障の規約として国際連盟を成立せしめたり，是れ人道の為め寔に慶すべき事なりと雖も軍備制限の不徹底なる，人種的差別を是認せる此の連盟規約は真の平和を将来するには其の権威の余りに薄弱なるを思はしむ。今や我が国際関係は漸く紛糾を加へ来り殊に亜米利加，支那，西比利亜等に於ける排日の機勢益々其の度を強烈ならしめつゝあり，是れ其の罪の一半彼に有りと雖も我亦全然責なきに非ざるなり，翻って我が国内の現状を見るに社会生活上に於ける百般の改造を要すること切なるものあり，而して是が外形的実施は政策の運用に俟つべしと雖も其の内実的保障及び発展は素より教化の普及徹底に帰せざるべからず，斯の任務を果たすべき第一責任者は何人とすべきや。

斯く我が国の前途は将に暴風来の前兆を示すが如し，而して内に思想の渾沌，民心の動揺あるも未だ帰着すべき国民的精神の勃興を見ざるは誠に寒心すべきことに非ずや，此の時に当って吾人教育に身を奉ずる者は中正穏健なる思想を把持し自ら任ずるに精神界の指導者たるを以て正義人道の為め，国家発展の為め提携奮起せずして可ならんや。

二，吾人は教育界の現状を省察して何よりも先づ自己を改造すべし。

熟々我が教育界の現状を察するに吾人の従事しつゝある教育的事実は果して人として又は公民乃至国民として被教育者又は社会国家の真正なる要求に適応せる教育をなしつゝありや，吾人の境遇は之を果すべく適当なる地位に在りや，吾人の能力は之に応ずべく充実せりや，吾人は国家社会の重□を帯べるものとの自覚と自信とを有せりや，将来国家社会は重任の依托者として吾人の存在を尊重せりや，顧ふて茲に到れば喟然として痛歎せずんばあらず，遮莫吾人は職として身を是の重任に置き而かも国家の危機を目前にす，苟くも一日の偸安を許さゞるなり，宜しく呼応蹶起して各々眼界を大にし識見を拡め理解を進め所長を発揮し信念を篤ふし相提携共励して以て面目の刷新を期すべきなり。

三，教育の問題は教育者自ら之を解決すべし。

教育の事たる素より国家社会てふ有機的団体の一分業たること言を俟たず，然れども吾人は其の最も重要なる職能を果すべき地位にあるべきものなることを忘るべからず，吾人は実際家なり，故に徒らに新奇の思想学説を盲信することなく自らの経験及び證悟に照して真偽の鑑定，是非の判別をなし以て独特の見地を立てざるべからず。吾人は常に時勢及び生活の事実が将然すべき未来を予察して之に順応すべき準備を怠るべからず，吾人は国家社会の監督を受く，然れども其の権威に屈従して正当なる職分的威信を傷くべからず，吾人の業務は国家社会の経済的保障を受く，然れども吾人の業務に必要なる経費は吾人の正当なる要求によりて決せらるゝに至るべきことを期せざるべからず，斯して吾人は個人乃至社会国家の真正なる実際的改良家たる天分を果さざる

べからず。（傍点筆者）

四，吾人は連帯責任を以て職責を遂行せざるべからず。

吾人の任務は重大にして而かも吾人の境遇及び能力は誠に貧弱なり，吾人の赤誠より迸出せる正当なる主張も時に衆愚の邪説に阻止せられ権勢の横流に遮断せらるゝことなきにしもあらず，されど同人よ！貧弱の故を以て悲歎屈伏すること勿れ，相親和提携して一団をなし協心戮力して事に当れば大石克く逆流するの例あるを記せよ。

五，吾人の主張及び行動は飽くまでも公明正大なるべし。

吾人は協心提携して団力をなし共励互助して能力を錬磨し熟慮討議して主義方針を定め周到なる準備を整へ以て正道を進まんとす公明大正（ママ）期せずして自ら其の中に存すべきなり。

この５つの綱領の主旨は，次のとおりである。

(1)　第１次世界大戦後の世界の情勢およびわが国の現状にかんがみ，教育者は，「中正穏健なる思想を把持し自ら任ずるに精神界の指導者たるを以て正義人道の為め，国家発展の為め提携奮起」すべきである。

(2)　重責をになう教育者自身の自己改造が必要であり，教育者は，「宜しく呼応蹶起して各々眼界を大にし識見を拡め理解を進め所長を発揮し信念を篤ふし相提携共励して以て面目の刷新を期す」べきである。

(3)　教育者は，「徒らに新奇の思想学説を盲信することなく自らの経験及び證悟に照して真偽の鑑定，是非の判別をなし以て独特の見地を立て」るべきで，「国家社会の監督を受」けるものの，「其の権威に屈従して正当なる職分的威信」（傍点筆者）が傷けられるべきでない。

(4)(5)　教育者にとって「相親和提携して一団をなし協心戮力して事に当」ることが必要であるが，その進むべき道は常に「正道」でなければならない。

次に，更新会結成のねらいについてみる。それについては，『更新』の創刊号に記載された「更新会とはどんな会か」という記事のなかで，以下のように説明されている[4]。

…現在教育者を以て組織された各種の会は果して真に教育者の自覚に基いて，要求に依って出来たものでしやうか，或る情実に約束されて入会するとか退会の自由を得ない為めに名義だけは存して置いても会費を出し渋ったり，全く納めなかったり，それから会の事業も多くは幹部の独断によって決められ多数の会員は與り知らず，風馬牛関せず焉といった風な不真面目な実例もあるではありませんか，随って会員は其の会に対する愛執の念も責任感も多くは麻痺してゐるといふ状態が多いかの様に見受けられます。吾々同志の者が更新会を組織しやうといふ考を起したのも這邊に一種の慊らなさを感じたからであります。

各会員は真に其の会を我が物と思ひ，会員全部が連帯で責任を分担し得る会，会の事業も会員全部の理解のもとに清新な自由な真剣な潑溂な本当に教育の根底に触れた，真正に教員の素質を改造するに必要な第一義的な仕事がして見たいと思ひます。

これから明らかなように，更新会結成のねらいは，会の運営が幹部の独断によってなされた従前の教育団体を批判し，会員が会を自分のものとして，会員の連帯によって責任を分担できる教育団体をつくり上げ，「真正に教員の素質を改造するに必要な第一義的な仕事」をすることにあった。

同会に入会する者は，同会の趣旨に賛同し，一定の会費を納める者であった。そして，入会，退会について，繁鎖な条件や拘束がなかったので，いやになったらいつでもやめることができた。

また，同会結成当初において予定されていた事業は，次に示すとおりである[5]。

一，機関雑誌の発刊

大家名士の論説意見，会員の論説研究，感想，創作通信等を掲げ会員の自覚を促し併せて意志の疎通をはかりたいと思ひます。

二，講習会，講演会，研究会等の開設

少くとも年一二回是非開設したいものです。

三，図書の共同購読及び交換講読

四，共同視察其の他必要なる事項

更新会は，結成当初から，同会の運動に理解のある岡村勇二阿武郡長と脇本直甫阿武郡視学の支援[6]もあって，順調に発展していった。同会の会員は，阿武郡内の教員が中心であるが，その他の地域においても，数多くの会員が生まれた。

1921（大正10）年から1923（大正12）年における更新会の会員数の推移を示すと，表(1)のとおりである[7]。

表(1)によると，総会員数は，1921(大正10)年には163名，翌年9月末現在で260名に，そして，1923(大正12）年11月末現在では，302名にのぼっている。

郡市別にみると，1922年9月末現在は，阿武郡が最も多く202名，その他，大津郡2名，吉敷郡11名，佐波郡10名，熊毛郡13名，下ノ関市8名，玖珂郡3名，厚狭郡4名，都濃郡1名，山口県外6名[8]であった。そして，1923年11月末現在では，阿武郡200名，大津郡6名，吉敷郡29名，佐波郡11名，熊毛郡14名，下ノ関市7名，玖珂郡8名，厚狭郡2名，都濃郡2名，大島郡1名，美彌郡4名，豊浦郡3名，宇部市2名，山口県外13名[9]にのぼった。

なお，1923年11月末現在で阿武郡内の更新会員は200名であったが，同年7月1日の統計[10]によると，阿武郡内の全小学校教員数は402名であり，阿武郡内では2人に一人が更新会員であったといえる。

次に，先にあげた更新会の中心人物の一人の三戸雅乙，同会の運動を支援した宗教家の伊藤證信・本間俊平および同会の運動に深い理解を示した脇本直甫阿武郡視学について説明を加えておく。

まず，三戸雅乙からみる。三戸は，1921（大正10）年，山口県教育会の雑誌『山口県教育』誌上に，「教育者としての自己測量」という論文を発表しいる。その冒頭で教育者自身の自己改造の必要性を唱え，まず第一に着手すべきは教師自身の自己反省（＝「自己測量」）であると次のように述べている[11]。

…現代の教育の上に改造訂正を要すべきものが，家庭社会などの環境方面にも，制度の方面にも，

表(1)

年（年度）	総会員数	郡市別会員数		
		阿武郡	その他	
1921（大正10）年度	163名	147名	16名	
1922(大正11)年9月末	260名	202名	大津郡	2名
			吉敷郡	11名
			佐波郡	10名
			熊毛郡	13名
			下ノ関市	8名
			玖珂郡	3名
			厚狭郡	4名
			都濃郡	1名
			山口県外	6名
1923(大正12)年11月末	302名	200名	大津郡	6名
			吉敷郡	29名
			佐波郡	11名
			熊毛郡	14名
			下ノ関市	7名
			玖珂郡	8名
			厚狭郡	2名
			都濃郡	2名
			大島郡	1名
			美彌郡	4名
			豊浦郡	3名
			宇部布	2名
			山口県外	13名

設備教材の方面にも教授訓練養護の方面にも幾多あるであらうが，其の根本となり起終点となるものはどうしても教育者自身の改造であらねばならぬ。而してこの教師の改造といふことについても更に幾多の方面があるけれども，その第一着手は教師自身の自己反省，自己測量であらねばならぬと信ずる。……

筆者は，1980（昭和55）年3月21日と同22日に資料収集のため水戸市を訪れた。三戸雅乙の4男規生氏宅へ赴き，三戸雅乙の妻とき氏と規生氏から三戸雅乙についての聴き取り調査を行った。それによると，三戸雅乙は，1888（明治21）年，阿武郡地福村に生まれ，山口県師範学校を卒業し，郷里の地福小学校へ着任した。そして，その後徳佐小学校へ勤め，1922（大正11）年に生雲小学校長となった。さらに，徳佐小学校長，厚狭郡厚狭小学校長，吉敷郡小郡小学校長を歴任した。ところが，脱疽

にかかり，大腿部から下肢を切断して隻脚となると，校長は勤まらないとして自ら退職した。退職後，山口県教育会に勤務し，教員互助会の創設に尽力した。1945（昭和20）年8月に地福村で没した。享年58歳であった。

家族の目からみた三戸雅乙は，部下の教員をかわいがる人で，自宅に教員が集まってくることがよくあった。彼の理想は，村を「教育村」にすることであり，夜学を開いて農村地域の青年の育成にも力を尽くした。

伊藤證信（1874（明治7）年生まれ）は，三重県出身の人物で，1905（明治38）年に上京し，機関誌『無我の愛』を創刊するとともに，「無我苑」を創設し，無我愛運動を展開した人物である。この運動は，幸徳秋水，徳富蘆花らによって支持され，一時期，河上肇が「無我苑」に身を投じていた。しかし，まもなく「無我苑」は閉鎖された。その後，1921（大正10）年に「無我苑」が再興され，機関誌『精神運動』が刊行されたが[12]，この時期は，ちょうど更新会の運動が高揚した時期である。伊藤は，更新会の発足当初から，同会の活動に協力し，機関雑誌『更新』の創刊号（「改造の発祥地」），第3号（「価値意識の展開」）に論文を投稿した。また，1922（大正12）年8月の夏期講習会では，講習の終了後午後8時から4日間にわたって「信仰座談会」を開催し，講習会をもりあげた[13]。伊藤は，当初更新会の会員ではなかったが，1923（大正12）年11月現在の会員名簿には，伊藤の名が記されている。

本間俊平（1873（明治6）年生まれ）は，新潟県出身のクリスチャンで，1902（明治35）年に秋吉台に居をかまえ，大理石採掘所を設けた。やがて，その採掘所に非行青少年を預り，その更生をはかるための感化事業を始めた。本間は，大理石製作の工程が人間教育（魂を磨く）の工程と一致すると考え，キリスト教の教えを中心として，労働と粗衣粗食の生活による意志の鍛練をとおして，非行青少年の更生に尽力した。こうした試みは，多くの人から注目され，のちに明星学園を創設した赤井米吉や成城小学校・玉川学園で活躍した小原國芳が本間の人徳を慕って秋吉台へ赴き，貴重な体験をした[14]。

本間は，更新会の運動の舞台である阿武郡とは目と鼻の先の秋吉台におり，更新会の運動を支援していた。機関雑誌『更新』の第7号（「生命の根源）」，第8号（「最大の知識」），第13号（「エスの人格」），第17号（「人生の苦悩」）第18号（「天災の斎す教訓」）第19号（「大なる奨励」）に論文を投稿するとともに，会員にはならなかったが，同会主催の講習会の講師を招くうえで力を貸した[15]。

脇本直輔（生年不詳）は，山口県出身の人物である。彼が教師生活を始めたのは，愛媛県で，最初の赴任校は，愛媛県温泉郡三津浜小学校であった。彼は，そこを振り出しに，やがて温泉郡視学となり，1921（大正10）年9月には，山口県へ戻り，岡村勇二阿武郡長の下で阿武郡視学を務めた[16]。

第1次世界大戦後，大正新教育運動が高揚したが，脇本は，愛媛県にいた頃からその教育運動に強い関心を持っていた。そのため，更新会の運動に異和感を感じることなく，阿武郡視学として，岡村阿武郡長とともにその運動を温く見守り，支援した[17]。

II．更新会の活動

すでに述べたように，更新会の結成当初に計画された事業として，「機関雑誌の発刊」，「講習会，講演会，研究会等の開設」，「図書の共同購読及び交換講読」および「共同視察其の他必要なる事項」があげられていた[18]が，これらの事業はほぼ予定どおり実施された。

1．機関雑誌『更新』の発刊

まず，機関雑誌『更新』の発刊事業についてみる。『更新』の創刊号から第25号までの発刊年月を示すと表(2)のとおりである。

表(2)

刊行年＼刊行月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1921（大正10）年					創刊号		第2号	第3号			第4号	
1922（大正11）年	第5号		第6号			第7号		第8号		第9号		第10号
1923（大正12）年		第11号	第12号	第13号	第14号	第15号	第16号		第17号	第18号	第19号	第20号
1924（大正13）年	第21号	第22号	第23号	第24号		第25号						

表(2)によると，創刊号は，1921（大正10）年5月発行であり，第25号は，1924（大正13）年6月である。おそらく，この第25号が最終の号であると思われる。

『更新』に掲載された記事の内容としては，おもに現場の教員の論文，随想録，詩，短歌，講習会での講師の講演内容を筆記した記録等が中心であった。しかし，1924年頃になると，当時の著名な人々に原稿を依頼する場合もあった。たとえば，『更新』の第21号（1924年1月）に，新渡戸稲造が「現代文化と婦人の運命」を，そして，島崎藤村が「巴里風俗に就いて」というタイトルで投稿している。そして，第22号（1924年2月）では，与謝野晶子も「杏仁水の夕」という詩を投稿している。

なお，参考のため，本論文の末尾に『更新』の総目次を示しておく。

2．講習会および山口島根両県教育者大会の開催

(1)　夏期講習会の開催

1922（大正11）年7月27日，28日の両日，防長新聞に，更新会主催，防長新聞社後援により，次のような広告が掲げられた。

夏期講習会

一，日時　八月二日より一週間（毎日午前八時より正午まで）

一，会場　（吉敷郡）山口町大殿小学校講堂（括孤内筆者）

一，科目及び講師

▽最近教育問題の前景と背景	東京第一高女校長	市川源三（二・三の両日）
▽教育と芸術	日本大学講師	松原　寛（四・五の両日）
▽新しき生活	京都一燈園主	西田天香（六日）
▽私の教育観	東京成城学校主事	小原國芳（七・八の両日）

其他は尚交渉中

一，申込注意

何人にても希望者は随意聴講を許す，会費は金二円也，七月三十一日までに会費を添へて至急阿武郡生雲小学校内更新会（振替口座下関七二五四番）或は山口県師範学校附属小学校（振替口座下関六七八二番）宛に申込ありたし（但し会費は当日持参にてもよし）

主催　更新会

後援　防長新聞社

1922（大正11）年8月2日から8日にかけて，予定どおり，更新会の夏期講習会が，吉敷郡山口町大殿小学校講堂で開催された。

8月2日午前8時から，森徳佐小学校長の挨拶ののち，東京第一高等女学校長市川源三が演壇に立った。「最近教育問題の前景と背景」という題で，「洋行帰りの豊富なる知識を引提て主に性教育及び男女共学論を説き会員に多大の印象を与」えた。この日は，出席者が二百数十名で，来賓としては，中谷山口県学事課長，西山山口県師範学校長，木村中村高等女学校長，岡村阿武郡長，脇本阿武郡視学，島田山口県師範学校附小主事が招かれていた[19]。翌8月3日も午前8時から，市川源三が，前日にひきつづき，性教育と男女共学論の必要性を唱えた[20]。

8月4日，午前8時から，日本大学講師の松原寛は，「教育と芸術」という題で，「第一講，芸術考察の諸態度第二講人生の真相と題してシャツ一枚となりて火の出る様な熱弁を振ひ現代は如何なる芸術を要求してゐるか芸術一般の要求は如何と説き起して美学と芸術学に移りカントの美学研究の態度，批判哲学の難点より生命至上主義の提唱に及びて第一講を結ひ休憩後現代生活の不安の現状を述べ宜しく伝統を崩壊すべしと絶叫し現代人精神生活の実相を説いて結」んだ[21]。

翌8月5日も午前8時から，松原寛は，「第三講芸術の真諦，第四講教育芸術論あり，第五講は芸術の生命は表現なりと説起して象徴主義と神秘主義に及び氏が所謂崇拝すると称する夏目漱石の芸術を批判し更に形式に捉はれたる短歌は芸術に非ず形式を超越せざるべからずと論じ綜合芸術を提唱して休憩第二講は人類の理想より芸術教育論を説」いた[22]。

8月6日午前9時から，京都一燈園主西田天香は，「筒袖の着物に袴もつけず至って簡便軽快たる服装にて赤き日傘をさして俥にて駆付」け，壇上に立ち，「一燈園の生活より現在に至る経路を引例して説明し正午休憩午後一時より再開一燈園と教育に関し述べ来りて聴講者に人生の或静的一面を語りて

多大の暗示を与」えた。当日の出席者数は340～350名にのぼり，来賓として，本澤県視学，黒金山口中学校長，栗原山口高等女学校長，木村中村高等女学校長，島田山口県師範学校附小主事，脇本阿武郡視学等が招かれた[23]。

8月7日午前8時半から，成城小学校主事の小原國芳は，「私の教育観」と題して，二百七十余名の出席者に対し，「滔々懸河の熱弁を揮ひ十二時過散会」した。翌8月8日の午前8時から，前日にひきつづき，小原國芳が「私の教育観」と題する講演を行った。次いで，三戸雅乙（生雲小学校長）が閉会にあたり，挨拶し，7日間にわたる講習会の幕を閉じた[24]。

この講習会でどれほどの費用がかかり，その費用をどのように捻出したのかをみるために，講習会における会計決算報告書を示すと次のとおりである[25]。

収入之部

一金五百参拾六円也　　是ハ会費二百六十八人分

一金百参拾四円也　　是ハ有志者ノ寄附金

之ノ内訳

八拾円也　小原國芳氏　弐拾円也　松原寛氏　拾円也　岡村勇二氏　五円也　島田牛雅氏　五円也　久津内猶一氏　参円也　野村吉治氏　参円也　美禰龍彦氏　弐円也　田中眞次氏　弐円也　岩田博蔵氏　弐円也　河村要一氏　壱円也　佐伯清音氏　壱円也　無　名氏

合計総収入六百七拾円也

支出之部

一金七百四拾八円三拾八銭　之ハ講師謝礼接待費等

一金二百四拾六円八十六銭　是ハ広告宣伝ニ関スル印刷，新聞広告，通信費等

一金五拾二円五十五銭也　　小使，電燈，湯茶，借物等ニ関スル費用

一金五拾弐円九十六銭　　其他諸雑費

合計壱千百円七十五銭

差引四百参拾円七拾五銭　欠損

この決算報告書から明らかなように，収入の部では，会費以外に，個人の寄附金に負うところが少なくなかった。また，寄附を行った者のなかに，講師として招かれた小原國芳及び松原寛もいたことが注目される。収入670 円に対し，支出が1100円75銭となり，430 円75銭の赤字を出しているが，こうしたことからも，研究サークルが講習会を開催することが経済的にいかに困難なことか窺うことができる。

(2)　山口島根両県教育者大会の開催

更新会は，1923（大正12）年8月にも，昨年同様，夏期講習会を開催する計画をたてていたが，県当局が講習会を開催するので，中止することになった。これについて，『更新』第14号（1923年5月）

のなかで次のように報告されている[26]。

夏期講習会の件……山口に於て夏期講習を催くる様前号に報告してありましたが，今回県に於て，大々的に，組織的に講習会をされるといふことで，今回は止めることゝなりました。無論県との交渉や講師に対する心配は三戸兄が寝食を忘れてされたのでした。

講習を止した理由をこう簡単に仕末することは出来ませんけれども，ゆるしていたゞきませう。

この報告からも明らかなように，県当局が講習会を開催するので，更新会は，同会主催の講習会を中止せざるをえなかった。この報告をみる限り，中止の真の理由が明確でなく，その説明も歯ぎれが悪いが，二つの講習会の日程が重なったことが一つの理由と思われる。こうした報告の背景には，更新会に対する県当局の抑圧があったことが推測される。

しかし，更新会は，夏期講習会の日程以外で，山口島根両県教育者大会（更新会の中心メンバーの一人，山縣良正の発案による会）の開催を計画した。その教育者大会に対する県当局の抑圧はみられず，同大会は，同年8月29日に予定通り開催された。

同大会は，午後3時から，島根県の津和野錦座で開かれた。山口県側からは本澤県視学，末宗阿武郡視学をはじめ，当日徳佐で開かれている阿武郡主催の講習会の会員ほとんど全員（百余人）が参加し，島根県側からは，河上鹿足郡視学をはじめ百数十名が加わった。また，当日鹿足郡津和野で開かれた講習会の講師，山口県師範学校の米井教諭等もこの大会に加わった。そのため，結局，合計二百十余名が参加することとなった[27]。

同大会における教師等の活動状況を示すと，次のとおりであった[28]。

先づ河上視学の開会の挨拶があって来賓の祝辞，会員の十五分間演説，余興，茶菓の(ママ)響応，記念品の配布の順序で最後に本澤県視学の発声で万歳三唱して解散しました。

開会の辞	河上鹿足郡視学	
来賓祝辞	大井津和野高女校長，本澤山口県視学，末宗阿武郡視学，米井山口師範教諭	
演　説	社会改造上より見たる教員組合	山本　悟（山口）
	自己の確認	村上米十郎（島根）
	家事科の改善	上野　マス（山口）
	行くべき道	弘中　俊恵（島根）
	江上無路路縦横	倉田　晋七（山口）
	婦人問題と女教員の責務	増本ヨシコ（島根）
	教育者の責務	山縣　良正（山口）
	世界的漸進文明の建設	岩田孫三郎（島根）
余　興	独唱（ピアノ伴奏）	内田二三子（山口）
	仝	柴田タネコ（山口）
	ピアノ独奏	西川　八重（島根）
	独唱（ピアノ伴奏）	山村　秀一（山口）

仝	島田　義夫（山口）
バイオリン独奏	田中　春正（島根）
体育ダンス（浜千鳥）	島根女教員数名

閉会の辞　　森徳佐小学校長

以上が同大会の状況であるが，当時の大正デモクラシーの風潮を反映した教員組合の問題や婦人問題等に関する演説が行われていた。また，余興においては，両県の教師が積極的に交歓している様子が窺われる。こうした大会は，県の枠をこえて教員が意見の交流をはかり，親睦を深めるうえで重要な意味をもつもので，当時としては画期的な試みであったと思われる。

(3)　図書の交換講読と読書会の開催

更新会の事業の一つに，当初「共同購読」が計画され，更新会として図書を購入し会員に閲覧させる予定であった。しかし，この事業の実現が容易でなかったので，同会は，会員の蔵書を「更新文庫」に提供させて，「相互の借覧に任」す「交換講読」を実施した[29]。そのねらいは，次に示すとおりである[30]。

…お互ひの蔵書を文庫に提供して，相互の借覧に任すといふことは，経済的にあります余裕のないわれわれ多くのものにとって限りなき読書欲の一部を満足させる上に於ていくらかの便宜を与へることになりはすまいか，尚一面，書籍を通じてお互ひの理解，抱擁，努力扶助を増進するための一助となりはすまいかといふ聊かの心附からこの文庫が生れたのであります。

これからわかるように，交換講読のねらいは，書籍の貸借をつうじて心の交流をはかることにあった。

交換講読を行う場合における「書籍借覧心得」は，「1借覧希望者は書目により直接蔵書者に申込まれたし。2郵送を要するものは郵送料添加のこと。3申すまでもないことですが，借覧書籍に対しては充分なる責任を以て対せらるゝやうお願ひ致します。」[31]である。

こうした更新会からの呼び掛けに対し，「更新文庫」に提供すべく書籍名を同会に通知した会員の数は，わずかであった。『更新』第2号，第3号によると，山縣良正（篠生校），吉岡恒郷（明倫校），藤田宗亮（椿東校），山内貞助（亀山），三戸雅乙（徳佐），山本悟（徳佐校），原實亮（下関桜山），久津内猶一（萩明倫）が本を提供した[32]。次に，集った本の傾向を知るために，山縣良正と山本悟の蔵書を示しておく[33]。

書　　名	編　著　者	蔵　書　者
生命之不可思義（上・下）	大日本文明協会	山縣　良正
欧州各国民の心性（上・下）	仝	仝
今日の科学思想	仝	仝
生物学人生観	仝	仝

遺伝及趨異	仝	仝
価値の哲学	仝	仝
実際の哲学	仝	仝
現代之教育的運動	仝	仝
独逸世界政策	仝	仝
露国民	仝	仝
心理学大集成	三浦藤作編	仝
民本主義の教育	田制佐重訳	仝
創造的進化	金子，桂井共訳	仝
ベルグソン哲学の解説及批判（二巻）	北冷吉著	仝
破壊と建設	中澤臨川著	仝
教育教授の改造（デュイー）	田制佐重訳	仝
教育の根本問題としての宗教	鰺坂國芳著	仝
トルストイ十二講	昇曙夢著	仝
力の生活	前田慧雲著	仝
修身教授革新論	鰺坂國芳	仝
大望（小説）	島田清次郎著	仝
死線を越えて（小説）	賀川豊彦著	仝
ジャン・クリストフ（仝第一巻）	豊島與志雄訳	仝
人生論（トルストイ）	相馬御風訳	仝
性欲論（仝）	仝	仝
我が懺悔（仝）	仝	仝
小説作法	徳田秋聲著	仝
「闇」（トルストイ小説）	訳者不明	仝
舊き文明より新しき文明へ	中澤臨川著	仝
人は何時覚醒するや	ウイルソン	山本　悟
社会改造思想史	岡　悌治	仝
有用鉱物の産地及び用途	吉村　万次，今泉　敏	仝
進むべき俳句の道	高濱　虚子	仝
断橋	岩野　泡鳴	仝
西洋音楽の知識	小松　耕輔	仝
一本の枝	武者小路	仝
友情	仝	仝
生の悲劇	吉田絃二郎	仝
心より心へ	仝	仝

象牙の堂を出でゝ	厨川白村	仝
征服被征服	岩野　泡鳴	仝
若山牧水集	牧水	仝
トルストイ日記	トルストイ	仝
性欲論	仝	仝
人生論	仝	仝
生と恋	三木　露風	仝
象牙の笛	小松　耕輔	仝
思想問題十六講	中澤・生田	仝
婦人問題と教育	鰺坂　國芳	仝
教育改造論	仝	仝
宇宙の謎	ヘッケル	仝
道	高濱　虚子	仝
夢見る日	加藤　武雄	仝
未明	里見　　淳	仝
受難者	江馬　　修	仝
不滅の像（三冊）	仝	仝
死	有島　武郎	仝
宣言	仝	仝
カインの末裔	有島　武郎	仝
反逆者	仝	仝
迷路	仝	仝
生れ出づるなやみ	仝	仝
小さき者へ	仝	仝
或女（二冊）	仝	仝
三部曲	仝	仝
愛は惜しみなく奪ふ	仝	仝
旅する心	仝	仝
小さき灯	仝	仝
泰西の名画集（四冊）	洛陽堂	仝
初夏の夢（画集）	名越	仝

これら２人の蔵書をみると，哲学書，教育書，自然科学関係の図書および小説等とさまざまな分野の図書があるが，なかでも，トルストイや有島武郎の著書が多いことが注目される。

このような交換読書奨励の動きとともに，同会の有志で読書会を組織しようという計画もあった。

1924（大正13）年4月の『更新』（第24号）のなかで，以下のような「読書会会員募集」の公告が出されている[34]。

読書会会員募集

◎教育の実蹟が挙らないのは教育者自身の熱のないことが重な原因だと思ひます。

◎教育者の熱のないのは本当な意味に於ての真理を握ってゐないからと思ひます。

◎もしも読書といふことが幾らか真実を探求するのに役立つものであったら吾々の発起したこの会も無意味なものではありますまい。

◎本会は賛成者のみを持って組織します。

◎退会入会は自由であり，会費などもいりません。

◎只同一の書籍を買って研究した後時日を定め会合して問答し場合によっては著者を聘し又は適当な講師を得て直接師導（ママ）を受けたりするのです。

◎最初の試みとして哲学概論宮本礼吉著又は紀平正美著にしました。会合は六月五日頃（農繁季休業中今のところ場所は山口にしてあります。）

◎賛成者は生雲小学校内山本悟宛に申込んで下さい。

発起者　三戸　雅乙
村瀬　貫一

この広告によると，読書会運営のプランとして，メンバーが一堂に会して共通の図書を題材に議論を行ったり，同書の著者を招聘して直接指導を受けたりすること等があげられている。

III．更新会の解散

すでに述べたような活動を展開した更新会もやがて，行政権力の抑圧と同会内部の財政問題が原因で解散した。同会解散の期日については，明確に示すことができないが，それは，1924（大正13）年6月から同12月頃にかけてのことであろうと推測される。同会の中心メンバーの一人，桑原茂政氏からの聴き取り調査によると，林阿武郡長が三戸等の主要メンバーを郡役所に招致し，同会の解散を示唆した。さもなければ，分断政策により，同会の中心メンバーが転任させられる危険性があったという。このことについては，三戸とき氏からの聴き取り調査からも確認できた[35]。

次に，同会が解散に追い込まれた理由についてみてみよう。すでに述べたように，同会は，結成当初から岡村勇二阿武郡長と脇本直輔阿武郡視学の支援もあって，順調に発展していった。しかし，1922（大正11）年9月に，同会の運動に理解のあった岡村勇二阿武郡長が転任して，阿武郡を去った。これにより，更新会は，大きな支柱を失うことになった。

1923（大正12）年11月に国民精神作興に関する詔書が発布されたが，その年の12月に，皇太子狙撃事件，いわゆる「虎の門事件[36]」が起った。その犯人が山口県出身の共産主義者，難波大助であったため，この事件が山口県当局および県民に与えたショックは大きかった。そこで，この事件を契機として，山口県当局は，強力に思想統制を断行したのである。

山口県知事橋本正治は，1924（大正13）年1月，告諭を発し，「第四十八帝国議会開院式行啓に当り畏くも御召車に向ひ一大不敬を加へたる帝国未曾有の不祥事を発生せしは吾人国民として寔に恐懼措く所を知らさるなり蓋し我皇室の尊厳を冒瀆し我国体の精華に一抹の汚点を印したるは神人の共に怒る所なり」[37]と述べ，さらに，汚名をそそぐためにも山口県民に対し以下のように要望した[38]。

茲に我県民は此の重大なる時期を画し沈思内省従来に倍蓰せる努力を以て各々其の分を守り忠実事に膺り一面世態の変遷と人心の趨向とに深甚の注意を払ひ互に練磨砥礪盛に国家的観念の養成に勗むると共に質実剛健の風を馴致し国民精神の作興を図り先輩に愧ちざる防長人として将た忠良の国民として天壌無窮の皇運を扶翼し奉らむことを期すへし。

こうした県知事の告諭をもとに，県当局は，「不敬事件対策施設主要事項」を定めた。その内容は，甲，学校教育に関する方面と乙，社会教化に関する方面の2つにわけられていた。甲の方を中心にみると，中等学校，小学校，実業補習学校に共通する対策は，教師が「国体観念を明確に体得せしめんか為」に適切な図書を備えることであった[39]。そして，とくに中等学校においては，生徒に対する取締の方法として，「四，思想善導並取締に関し適切なる方法を講すること。1，生徒の読物並思想に対し周到なる調査をなし適切なる指導をなすこと。2，刊行物に対しては不断注意し生徒の趣味傾向に関する調査をなし適当に指導すること」[40]が指示された。

また，同じ頃，山口県教育会も，「不敬事件対策決議」を行っている。決議事項としては，「一，今回不敬事件に対し百万県民は連帯責任たることを痛切に自覚し挙県一致の態度を以て徹底的の対応策を講ずること。二，山口県教育会は郡市教育会と相策応し大に国民精神の作興を期すること。三，（略）」[41]であり，実行事項としては，次に示すことがあげられる[42]。

一，挙県恐懼の至誠を披瀝し将来再ひ斯かる不祥事の出来せさらんことを祈誓すると共に之か対策を講するの機会をつくること。（略）

二，国民精神作興に関する聖旨の徹底並に思想善導に対し懇談会講話会等を開催し及ひ之を開催せんとする者を援助して斡旋の労を執ること（略）

三，印刷物により国民精神作興思想善導の方法を講すること（略）

四，思想調査機関を設置すること（略）

五，（略）

六，（略）

七，（略）

八，思想善導に関し行政教育の諸機関に対する本会の要望を明にして其の実現に盡力すること（略）

九，（略）

以上みたような思想統制を強化する動きのなかで，更新会は解散へと追い込まれたものと思われる。

同会を解散に追い込んだ要因としては，先にのべた外的な抑圧があるが，それ以外に，同会自体がかかえていた財政上の問題があげられる。

1922（大正11）年7月から翌年2月末までの同会の会計報告によると，収入353円25銭，支出493円44銭で，差引，140円19銭の赤字となっている[43]。そして，1923（大正12）年1月から同11月末までの会計報告をみると，収入923円39銭，支出851円40銭，差引，71円99銭の黒字であった。しかし，収入923円39銭の内訳をみると，借入金と寄附金が全体（923円39銭）のなかで，522円85銭を占め，会費による収入はわずか400円54銭となり，半分にも満たなかった[44]。こうしたことからも，同会は，財政的に厳しい状況に追い込まれていたことが知られる。

ま　と　め

更新会は，会員が会を自分のものとして，会員が連帯して会の運営を行う教育団体の創造をめざしていた。その事業としては，機関雑誌『更新』の発刊，講習会の開催，山口島根両県教育者大会の開催，図書の交換講読と読書会の開催があげられる。同会は，当時の大正新教育運動の担い手が模索した教授法改革の問題よりも，その前提となる自己修養運動を展開してきた。

このように，更新会の活動の中心が教師自身の内面の充実をはかることにあり，いささか精神主義的な側面がみられるが，これは，更新会の支援者に西田天香，伊藤證信および本間俊平等がいたことと無関係ではなかったと思われる。

同会は，1924（大正13）年頃に，行政権力の抑圧と同会内部の財政問題が原因で解散に追い込まれた。そのため，同会の活動期間は4年程で，短かった。しかし，同会の自己教育運動は，山口県下の教師たちに大きな刺激を与えた。桑原茂政によると，同会の運動が高揚するにともない，「これまでとかく因循姑息であった教員気質に，清新潑剌たる進取の精神」がよみがえり，「学校劇」や「音楽・図画・体操科教育運動」が振興したという。また，同会の運動に触発されて，熊毛郡熊嘯会，大島郡みどり会および大島郡猩々会のようなサークルが生まれ，それぞれのサークルごとに『熊嘯』，『みどり』，『かむろ（家室）』という教育雑誌が発刊された。なお，教育雑誌は，こうしたサークル以外にも各学校や個人を単位として数多く発刊されている[45]。

このように，同会は，山口県教育界において大きな役割を果たしたのであった。

注

(1) 筆者は，1980（昭和55）年3月3日に山口県萩市を訪れ，更新会の中心メンバーの一人，桑原茂政氏から聴き取り調査を行った。そして，同年3月21日と22日に水戸市を訪れ，三戸雅乙の妻とき氏と4男規生氏から聴き取り調査を行った。

(2) 桑原茂政「更新会盛衰記」（小原國芳編『日本新教育百年史』7（中国四国）所収，玉川大学出版部　昭和45年8月28日　P.315）なお，これらの教師たちは，山本以外すべてこの地方の生まれで，皆「みずから進んで郷土の学校に奉職し，「郷土の開発と教育文化の向上」をめざして精進しつつあった」教師である。（前掲書P.315）

(3) 『更新』創刊号　大正10年5月25日　P.1～P.3

(4) 前掲誌　P.3～P.4

(5) 前掲誌　P.4～P.5

(6) 桑原茂政「更新会盛衰記」（小原國芳編前掲書　P.316）

(7) 『更新』第5号（大正11年1月31日）P.51，同第9号（大正11年10月25日）P.65～P.68，同第20号（大正12年12月20日）P.31～P.35

(8)　この６名の居住地と氏名は，次のとおりである。(『更新』第９号　大正11年10月25日　Ｐ.68)

神戸市　　伊藤傳次
東京市　　伊藤誠亮，堀豊蔵，内山勇熊
大阪市　　山中光一
京城市　　山中岑三

(9)　この13名の居住地と氏名は，次のとおりである。(『更新』第20号　大正12年12月20日　Ｐ.35)

広島高等師範学校附属小学校	兒積玉安
島根県鹿足郡柿木村	有田政子
神戸市平野馬場町223	伊藤傳次
東京市本郷区春木町１ノ120	伊藤誠亮
朝鮮全羅北道益山郡野里日出町554	山中岑三
大阪市北区毛馬町城北第一小学校	山中光一
東京市外巣鴨町仰高小学校内	内山勇熊
東京市中込区柳町39	原　實亮
横浜市神奈川小学校	堀　豊蔵
岡山県天城中学校	山崎富傳市
東京府下中野字中野265	伊藤證信
大阪市南区水崎町中山太陽堂	三浦耕作
群馬県前橋女子師範学校	中村利男

(10)　防長新聞　大正12年７月28日

(11)　山口県教育会『山口県教育』　大正10年１月号　Ｐ.13

(12)　千葉耕堂『無我愛運動史概観』　無我愛運動史料編纂会　昭和45年４月１日　Ｐ.23～Ｐ.40

(13)　防長新聞　大正11年８月３日

(14)　三吉明『本間俊平の生涯』　福音館書店　昭和41年７月15日　Ｐ.121～Ｐ.143，中野光『大正自由教育の研究』　黎明書房　昭和43年12月10日　Ｐ.218～Ｐ.223

(15)　『更新』第８号　大正11年８月７日　Ｐ.86

(16)(17)　桑原茂政「更新会盛衰記」(小原國芳編前掲書　Ｐ.316～Ｐ.317)

(18)　注(5)に同じ。

(19)　防長新聞　　大正11年８月３日

(20)　前掲新聞　　大正11年８月４日

(21)　前掲新聞　　大正11年８月５日

(22)　前掲新聞　　大正11年８月６日

(23)　前掲新聞　　大正11年８月７日

なお，西田天香は，1922年(大正11)年８月６日，昼間の講演のあと，午後７時半から山口公会堂で，「課外講演会」を開いた。その状況については，防長新聞（大正11年８月８日）のなかで，次のように述べられている。

……聴衆六百余名にて，朝枝紫福校長の紹介に依り西田氏は筒袖に兵古帯の装ひにて演壇に立ち「新しき生活」と題して一燈園式を赤裸々に表現して一燈園の由来及び園内約二百人の家庭生活振を表白し創始十九年に渉る吾々の生活は外観頗る貧弱に見ゆるも其内容を観察すれば比較的裕福なり我等の空想は今や実現して理想化したり長州は日本の建設者なるが一燈園生活を採用すれば世界の建設者ともなりて貢献する事あるべしとて通俗的に約三時間の口講演を試み聴衆は甚大なる感興を与へ十時二十分散会したるが氏は七日午前七時二十三分山口発列車にて美彌郡共和村へ向へり。

(24)　防長新聞　　大正11年８月８日，９日

(25)　『更新』第９号　大正11年10月25日　Ｐ.69

(26)　前掲誌第14号　大正12年５月10日　Ｐ.26

(27)(28)　前掲誌第18号　大正12年10月25日　Ｐ.31～Ｐ.32

(29)(30)(31)　前掲誌第２号　大正10年７月30日　Ｐ.27

(32) 前掲誌第2号　大正10年7月30日　P.27～P.32，前掲誌第3号　大正10年8月12日　P.28～P.29

(33) 前掲誌第2号　大正10年7月30日　P.27～P.28，P.31～P.32

(34) 前掲誌第24号　大正13年4月10日　P.27

(35) 注(1)に同じ。

(36) この事件の処理問題を中心に教育史的な検討を加えた研究として，久木幸男「大正期教育の一断面――虎の門事件処理問題を中心に――」（池田進，本山幸彦編著『大正の教育』所収　第一法規　昭和53年9月25日）があげられる。

(37)(38) 山口県教育会『山口県教育』第288号　大正13年8月号　P.56

(39) 前掲誌　P.62～P.65

(40) 前掲誌　P.63

(41) 前掲誌　P.59

(42) 前掲誌　P.59～P.62

(43) 『更新』第12号　大正12年3月20日　P.61

(44) 『更新』第20号　大正12年12月20日　P.30

(45) 桑原茂政「更新会盛衰記」（小原國芳編前掲書　P.320～P.321）

機関雑誌『更新』の総目次

創刊号（大正10年5月25日）

更新会宣言書	更新会
更新会とはどんな会か	
改造の発祥地	東京　伊藤證信
親愛する若き兄弟姉妹へ	会員　吉岡恒郷
感想	山縣良正
改造上より見たる教育界の因襲	福江慶化
感想	原　實亮
感想	福江慶作
善人と神様	鹽見與平登
教員AとBとがした話	鹽見與平登
さあ行けよ	山村紫水
覺めよ	
鰺坂文学士を招ぶといふことについて	山縣　生
三つのこと	
会員（賛同者）名簿	
編輯室より	

第2号（大正10年7月30日）

巻頭言　第一歩	
愛する若き兄弟姉妹へ(二)	萩　吉岡恒郷
今の教育はもっと芸術化したい	篠生　山村秀一
教育者が不思議にも人間でないと言ふ話	地福　鹽見與平登
人間になれ	篠生　山縣良正
朝愁	萩　江村つち子
彼（其ノ一）	椿東　小島経彦
罪悪でも上品な方	地福　福江慶作
教室での一つの出来事	下関　實　亮
偶感	地福　岩村養和
私の心にいろいろな食物を与へられた先生方のこと	地福　鹽見與平登
苦を脱することは？	徳佐　沙　子
嬉しさの餘り	生雲　阿武農實
机の一つ一つにキッスしたい晩	福川　吉田　理
たゞ愛しやう	篠生　山村秀一
少年少女達よ	三見　城市成男
不思議	徳佐　沙　子
旅より（和歌）	桑原茂政
お願ひ	編輯部会計部より
予告	
更新文庫に付いて	
更新文庫の書目（其一）	
新入会員氏名	
会費受領者氏名	
編輯室より	

第3号（大正10年8月12日）

巻頭言	
価値意識の展開	東京　伊藤證信
人生と教育	嘉年校　詩毛留
心の向け方の指導	明倫校　久津内猶一
先づたれも一学年について考へよ	篠生校　山村秀一
汝のパンを水の上に投けよ	地福　岩村養和
私の祈り	徳佐　三戸雅乙
教師らしからぬ教師	持坂　長谷川泉水
彼（其一）	椿東校　小島経彦
無駄な話	下関　原　實亮
或教へ子の面影	椿東　小島経彦
湊の雑音（短歌）	下関　原　實亮
盛夏憤慨（詩）	福川　吉田　理
秋来歌（短歌）	椿東　孤鳥子
我は人間也（短歌）	福川　吉田　理
更新文庫書目（其二）	
新入会員氏名	
会費受領	
編輯室より	

第4号（大正10年11月25日）

巻頭言	
教育費節減問題について	山縣移山
真人の教育	吉高詩夫
東京市及長野県教育を視て	村瀬貫一
肥後農友会の農事実習所を紹(ママ)会す	山時隆信
己を咒咀する者	桑原茂政
自嘲	吉岡半角
故郷にありて	江村隆雄
Sの生活	山本沙子
曙	江村隆雄
難破船	寺山月亭
恐ろしき生命のかたまりよ	吉田　理
愛せられないなやみ	山村秀一

孤独のかなしみ　徳佐沙子
み寺の鐘　しげる
青眼白眼　桑原茂政
弁明　吉田翠泡
秋の夕　孤島千鳥
雑報

第5号（大正11年1月31日）

立脚点を異にしたる間抜けた対話　巻頭言
思　潮
教育擁護運動の根本問題　萩　吉岡恒郷
人間の卓越性　地福　鹽見與平登
あれでも中堅教員か　宇田　吉川禎三
研　究
日本歴史人物の体育的考察　生雲　阿川利一
お断り　三谷　山村秀一
想華及創作
神への門戸　山口　森山螢水
涙と神と　三谷　山村紫水
希望雑感数項　篠目　山縣移山
緑陰自戒記　萩　山時隆信
若き人々よ　たぬき
努力至上論　生雲　阿武農實
彼の女　千　鳥
法悦の一瞬　茂　二
川霧（短歌）　地福　なにがし
Sの生活　徳佐　山本沙子
童謡二篇　椿西　吉田をさめ
子等の祈り　小川　溪　翠
雑　輯
雑誌を発行することに就て　萩　久津内猶一
本誌の内容充実策に就て　編輯室
謹告　仝
編輯小僧より
大正十年度更新会々計報告

第6号（大正11年3月27日）

教育者の生活と児童の生活　巻頭言
我等の主張
思　潮
教育改造の一歩　萩町　吉岡恒郷
更新会々員諸君に寄す　山口　熊野隆治
更新雑感　生雲　雅　乙
編輯小僧のシャボン玉　仝　茂　三
貧しきものゝ私語　椿東　太白生
研　究
実現可能なる本郡教育振興策
更新　萩中　岩田博造
答　生雲　村瀬貫一
教育者の権威を高めよ　大井　高松鶴吉
答　椿東　藤田宗亮
返信　萩　吉岡恒郷
設備不備の救済策としての室内体操の提唱　生雲　阿川利一
補習教育の刷新に就て　萩　山時隆信
編輯子曰く
想華及創作
挨拶にかへて　下関　Mの字
都会から田舎から　山縣　生
彼　椿東　小島経彦
短歌数片　うしを・葉子・かもめ
雑　輯
新卒業生諸君に與ふ　生雲　村上俊夫
地下水（開巻第一注目のこと）　編輯子
会員小島貞子氏の死を悼む
編輯餘録

第7号（大正11年6月20日）

巻頭言
我等の主張
思　潮
過ぎし一年を顧みて未来に望む　地福　山縣移山
生命の根源　秋吉　本間俊平
失はれたるもの　東京　伊藤誠輔
霊の光に生きよ　無名氏
尊き犠牲　浅江　吉高詩夫
人間の中毒性　生雲　福江慶化
第一歩　三谷　長谷川芳水
随発　高瀬　紫山迂人
私の新しい生活の一斑（一・二）　山口　山内貞助
求むるもの希ふもの　生雲　三戸雅乙
研　究
吾人の努力　萩　山時隆信
教育振興策号の後へ　宇田　古川　生
表情遊戯　生雲　阿川　生
想華及創作
漂泊の魂　徳佐　幽　光
偶感一束　徳佐　寺山月亭
私信公開　徳佐　孤萍生

眠れる人々に　生雲　沙　子
十種峯麓より　徳佐　寺山月亭
小さき心より　萩　花びら
つれづれ　生雲　祥　子
かなしみ　生雲　沙　子
童謡　生雲　不二子
雑　輯
地下水(二)　編輯子
熊嘯会員より
新入会員，会費領収，特別寄附
編輯室

第8号（大正11年8月7日）

巻頭言
吾等の主張
思　潮
吾等の求むるもの　地福　山縣良正
教育の出発　下関　守田　生
ロシヤ飢饉救済について　東京　伊藤誠輔
恋愛論　山口　螢水生
四疊半の裡から　山口　山内貞助
最大の知識　秋吉　本間俊平
私信公開　徳佐　佐伯清音
現代思潮から美しい古代思想へ　徳佐　佐伯節生
教育愛　大歳　白木佐加恵
体育及び体育観確立の必要　三谷　長谷川芳水
教師の力　三谷　木橋翠谷
姿見に写らぬ心写しみん如何に見にくゝ見ゆる我かと　地福　J　凡生
サチアグラハ　生雲　福江慶作
研　究
家庭踊について　生雲　阿川　生
想華及創作
東都より　東京　吉岡羊角
M子より　徳佐　きよし
信仰の偉大なる力　山口　山内　生
故緒方先生　彌富　溪　翠
夜明の汽車（短歌）　下関　原あけら
温泉（短歌）　徳佐　かもめ
一本の樹（長詩）　生雲　美代二
兼ちゃん（童謡）　生雲　不二子
狂へる流（詩）　生雲　沙　子
子供のお母さん　大内　藤本リン
K先生　生雲　てつを生
雑　輯
地下水　編輯子
新入会員，会費領収，特別寄附　会計係
あいさつ　山口　林　虎一
編輯室　編輯子
余白としての私　三　戸

第9号（大正11年10月25日）

吾等の主張
思　潮
芸術教育の考察　東京　吉岡恒郷
新文明の建設と日本の芸術　防府　野原秀錚
郡教育会総会の回顧　萩　岩田博蔵
クエーカー宗の信仰　山口　山内貞助
小学教育に対する一要求　深川　白土貞利
帝国民として欠ぐべからざる自覚　彌富　青原頼一
東京市の小学教育より本郡教育を反省す　多摩崎　磯部千尋
真の生活　萩　T　子
想華及創作
真昼の空地に立って　東京　トレーニン生
拾ひ文　下関　M　生
私信公開　徳佐　きよし
眠られぬ夜（詩）　東京　トレーニン生
りんご（童謡）　山口　吉田翠泡
盆踊（民謡）　仝　人
病友哀慕抄（和歌）　椿東　このじどり
私は頼るべき光を　地福　岩村　嵩
幻滅(一)　山口　吉田翠泡
雑　輯
地下水(四)　編輯子
更新会会員名簿　仝
会費領収　会計係
夏期講習会会計決算報告　仝
編輯室　MとS

第10号（大正11年12月20日）

巻頭言
吾等の主張
思　潮
体験の教育　宮野　久芳庄二郎
教育といふこと　富海　藤本邦男
現代と家族制度　東京　伊藤誠亮
模倣より創造へ　萩　荒木彌吉
研　究

愛知実業学校を学べ　萩　山時隆信
　想華及び創作
旅の親と子　椿東　素　芳
貧しき者の私語　奈古　太白星
美しき自己　地福　水津生
得所不得
旅人のノートより　奈古　小島経彦
私の言葉　東京　木村秀吉
詩一篇と短歌十一首　東京　木村ひでよし
旅にて（詩）　萩　まちこ
阿武巡り（短歌）　深川　白上櫻塢
梟汁を啜る夜　奈古　悲沙烏
　雑　輯
地下水　沙子生
新入会員　編輯子
会費領収　会計係
特別寄附名簿　会計係
編輯余録　呂夢沙

第11号（大正12年2月10日）

〔表紙〕吾等は永遠に向ひて進み行く　山　S
　思　潮
最近教育問題の前景と背景（講演）　東京　市川源三
芸術論　東京　木村秀吉
補習教育の振興と農村青年の進路　萩　山時隆信
　研　究
少年智能検査法（紹介）　白水　佐伯生
　相　華
教育雑談　下関　守田　保
病床漫筆　白水　きよし
雑相二茎　宮野　久芳庄次郎
暗愁の沈黙　椿東　永富正志
久芳先生へ　淳美　中西利衛
年頭の感　萩　SJ生
妻の逝きし後の我　風間　吉崎来一
私の言葉　東京　木村秀吉
青葉日記　萩　まちこ
　詞　華
檜扇（和歌）　徳佐　かもめ
中禅寺湖畔にて（和歌）外一篇　萩　はなびら
黒烟の（和歌）　萩　T　子
短歌　杜詩路
思ひ出（詩）　萩　T　子
華厳の瀧（詩）　萩　花びら
夏の思出（伊藤證信氏を憶ふ）　生雲　沙　子
　創　作
嵐の音（創作）　明　良
まぼろし　野の人
一羽の鳩（童話）　周　二
　雑　輯
年頭通信いろいろ　逆水生
地下水　逆水生
編輯会計便り
　新入会員
　会費領収
　特別寄附
　編輯便り
カット　山　S

第12号（大正12年3月20日）

　思　潮
宗教哲学　熊野宗純師
　研　究
作業に及す音の影響　東京　松井三雄
　想　華
爐邊雑想　宮野　久芳庄二郎
薄暗い灯の下にて　東京　伊藤誠亮
　詞　華
微吟（和歌）　宮野　久芳愁郎
特権外六篇（詩）　小川　抱　外
小雨降る夜外二篇（詩）　萩　華
編輯室だより　沙　生
　創　作
スフインクス　沙　子
　雑　輯
編輯員足下　イデヤ編輯室より
地下水　逆水生
編輯会計便り
　入会者氏名，会計報告　A　生

第13号（大正12年4月10日）

巻頭言
　思　潮
最近ロシヤ文学の研究　早稲田大学教授　片上伸氏述
エスの人格　本間俊平
　研　究
教育の基礎人生の食物(一)　山時隆信
　想　華，詩　華
私の言葉(三)　哲学士　木村秀吉

神は人より幸福にしか導かない　山村秀一
我が愛する子供達よ（詩）　高田稔穂
　創　作
嵐の音(二)　明　良
　雑　輯
地下水(八)　更新会
会計編輯便り
　新入会員，会費領収
　編輯便り（投稿規定，入会注意其他）

第14号（大正12年5月10日）

吾等の主張　更新会
　思　潮
一燈園の生活(一)　西田天香
　研　究
教育の基礎人生の食物　山時隆信
　想　華
雑念雑言　久芳庄次郎
一草のそよぎ　K　女
詩（四つ）　抱　外
　雑　輯
貴紙を通じて会員諸君に　山時隆信
地下水　更新会
会計編輯便り

第15号（大正12年6月10日）

巻頭言
吾等の主張　更新会
　思　潮
一燈園の生活(二)　西田天香
　研　究
子供は世界の希望である　伊藤誠輔
　想　華一詩
つまらない　浮　雲
雑念雑言　久芳庄次郎
そのひ，そのとき（詩）　木村秀吉
自己諦観　如　生
春窓断想　久芳庄次郎
　雑　輯
地下水　更新会

第16号（大正12年7月10日）

巻頭言
吾等の主張　更新会
　思　潮
人類の歴史　伊藤誠輔
新時代の教育　城市成男
　研　究
教育の基礎人生と食物　山時隆信
　想　華
教育雑談　守田　保
緑陰自戒記　山時隆信
農村指導者としての芸術観　城市成男
　雑　輯
地下水（十一）　更新会
会計編輯便り　AとY

第17号（大正12年9月10日）

巻頭言
吾等の主張　更新会
　思　潮
人生の苦悩　本間俊平
青年団とは何ぞや　阿武諄生
　想　華
難喜多苦なるの記　岩田博蔵
〔詩〕青春礼賛（ルベン，タリーオ作）　木村秀吉
　研　究
農村の浮沈と飲酒問題　山時隆信
　雑　輯
地下水（十一）（ママ）　更新会
会計報告，新入会員名簿　A　生

第18号（大正12年10月23日）

巻頭言
吾等の主張　更新会
天災の斎す教訓　本間俊平
俗物と天才　木村秀吉
有島武郎氏の死について(一)　山縣良正
理想論　中村利男
自我の尊重に就いて　小川五郎
報告と感想　沙　人
会計報告

第19号（大正12年11月18日）

巻頭言
吾等の主張

大なる奨励　本間俊平
A氏の死について(二)　山縣良正
現在の否定から現在の肯定へ　守田　保
鉢巻　中村清太郎
「児童劇」金のバケツ　木村秀吉
編輯会計通信

第20号（大正12年12月20日）

巻頭言　更新会
更新会の過去現在未来　三戸雅乙
現代と批判精神　中村利男
普選に当面して　阿武農實
いななき　寺山月亭
月見草　あつみ
悲壮児寺山月亭を小論す　吉村俊郎
遭難者実記　H　生
吾等の使命　山本沙人
地下水　更新会
会計報告　更新会
会員名簿　更新会

第21号（大正13年1月10日）

巻頭言
現代文化と婦人の運命　新渡戸稲造
教育上に於ける試験過重視の弊に就て　木村秀吉
日本数学史の大要　野村敏助
三人集
　病床連作　石原　純
　熱想者の旅　木村秀吉
　旅　原阿佐緒
巴里風俗に就て　島崎藤村
或る朝の時の流れ　山縣良正
断想　野村敏助
「汝の敵を愛せよ」について　久芳庄次郎
バクダン　佐伯きよし
個の反逆　福江慶化
通信
会計便り

第22号（大正13年2月15日）

巻頭言
大愛と大智の交錯融合　佐伯清音
自由の真諦　伊東素芳
日本数学史の大要(二)　野村敏助
杏仁水の夕　与謝野晶子
鶯　野口米次郎
洗心樓雑記(一)　小川五郎
寂寥　停　路
彼岸　竹内夜詩子
短歌，俳句，抄評　鹽見與平登
葱売り王子　木村秀吉
通信欄
会費領収
編輯室

第23号（大正13年3月10日）

巻頭言
THE PILLARS　Yone Noguchi
当来婦人運動の極致　本間久雄
教育動機論　中村利男
感想集
　島崎藤村，近重眞澄，深作安文，佐伯　矩，
　澤村　眞，湯原元一，安部磯雄，高田保馬，
　浮田和民，昇　曙夢，小林愛雄，松村松年，
　高島米峰，谷本　富，堀内敬三，阿部次郎，
教育雑談(三)　守田　保
編輯会計通信

第24号（大正13年4月10日）

人間文化史上に輝く大哲カント　木村秀吉
開府前の江戸　文学博士　渡邊世祐
日本数学史の大要　野村敏助
教育愚見　登尾喜助
洗心樓雑記(二)　小川五郎
橋本東聲氏の歌に就て　宇佐川紅萩
通信其他
Memorandum 1 .2. 3　Tnmura

第25号（大正13年6月10日）

巻頭言
つむじ曲りの言葉　若月保治
人間のもつ心と言葉　木村秀吉
激動の中を行く　佐伯清吉
日本数学史の大要(四)　野村敏助
胸病む者（短歌）　香涙山人
酒に関する教育　山時隆信

会計編輯便り　　更新会